古代ロシア語の関係詞ИЖЕとКОТОРЫИについて
－16世紀の文献を中心とした関係詞の変遷－

藤代　節

0．はじめに

古代ロシア語[1]において関係詞として多用されるものに、ИЖЕとКОТОРЫИがある。この２つは、ロシア語史上で、主として、文献の性格によって分布を異にしながらも、共に関係従属節[2]を導く機能を担ってきた。ところが現代ロシア語においては、この二者のうちКОТОРЫЙ(КОТОРЫИ)のみが関係代名詞として機能している。

本稿においては、ИЖЕからКОТОРЫЙ、もしくは、ИЖЕ、КОТОРЫИからКОТОРЫЙという変遷について両者にとって最も意義深い時期であったと考えられる16世紀において、両者がどのように使用されていたかを明らかにし記述することを第一の目標とした。それに基づき、古代ロシア語の関係詞ИЖЕとКОТОРЫИの現代ロシア語に至る変遷上、看過することのできない点について考察を行いたい。従来の研究では、長い時間幅を一時に扱ったもの（Сумкина:1954）や、両者のうち一方のみを専ら扱ったもの（Качевская:1954）が多かったので、本稿はそれらを補うものとなろう。

1．関係詞としてのИЖЕとКОТОРЫИ

ロシア語における関係詞は、次の２つのタイプに大別できる。

i)従属複雑文において、主節中の所与の（代）名詞（句）を修飾する従属節を導く（すなわち、その従属節と主節を結び付ける接続詞としての役割と、従属節中において代名詞あるいは副詞の役割を果たす）単語としての関係詞。

例１．[3]

Мнится не согрьшяя у богу, и есть поганого горье, и обьщникъ есть нечестивымъ, о них же пророкъ Исаия рече:

「不信心な者共」	prp.+P.	ИЖЕ
m.pl.D.	「-について」	m.pl.P.

/Дом., гл.18/

「彼は、神に対して恥ずべきことがないと考えているが、彼は異教徒よりも悪しく、予言者イサヤが（その人々について）語った不信心な者どもと共犯だ。」

例２．И тебе было пеняти на своих людей, которые неправдою

prp.+A. 「自分の」「人々」 m.pl.N.
「-に対して」 m.pl.A m.pl.A.

посылают, а наши послы от тебя напрасно мучились от твоего

「伝える」
prs.pl.3

неразсужения. /Пос. Иог. Ш./

「おまえは、偽りを伝えるおまえの家来たちを責めるべきだったのだ。当方の使いの者は、おまえのところへ行っておまえの無分別に苦しんだのだ。」

ii）従属複雑文において、主節中に被修飾語となる（代）名詞（句）を持たず、名詞節を導き、接続詞と代名詞の役割を果たす単語としての関係詞。

例３．Не мни, человече, яко лож видѣние се, но истинну ти глаголю: востани скоро и повѣждь, яже ти преже возвестих. /К.И., гл.71/

ИЖЕ 「告げる」
aor.sg.1

「人よ、この光景が偽りだと考えるな。私は、おまえに真実を語っているのだ。すぐに起きて私がかつておまえに告げたことを見なさい。」

古代ロシア語においては、次のものが関係詞としての役割を果たす[4]：КОТОРЫИ、КОИ、ИЖЕ、КТО、ЧТО、ГДЕ、КУДА、ОТКУДА、ИДЕЖЕ、КОГДА、ЯКО、ЕЛИКО 等。これらの関係詞のうち、ИЖЕとКОТОРЫИは、使用の頻度が高く、古代ロシア語の文献でみる限り、統語上の機能及び形態上の振舞いにおいて競合関係にあると判断できる関係詞である。この二つは、当然のことながら、古代ロシア語11世紀から17世紀の長い時間を通して常に拮抗状態にあったとは考えられない。又、ある時期に斉一的にИЖЕがКОТОРЫИに交替したとも考えられない。これら二つは、その分布を異にしながら、又、各々が、変容を経ながら、一方は消失し、一方は現代ロシア語の関係詞の体系の中で大きな一画をなすに至るのである。

ИЖЕとКОТОРЫИは、先行詞に性・数において一致し、従属節中での要求に応じて格を変える。これら二つの来源と考えられるところは全く異なっている。従来の見解のほぼ一致するところでは、ИЖЕは指示代名詞のИに強意の助辞ЖЕが組合わさったものだとされている（Буслаев:1959, Ломтев:1956等）。指示代名詞に来源を持つため、ИЖЕは本来的に前方照応となる。つまり指示を受ける名詞を含む文(従属複雑文では主節にあたる文)が先行し、その被指示詞を受けてИЖЕが後置され、その主節を補う文（同上、従属節）が続く。そしてその二文は、パラタクシス、もしくは重文の形式（すなわち、二つの文が並置の接続詞И「そして」やИНО「すると」等でつながれる形式）をとって生

起する。このパラタクシスによる、もしくは、並置の接続詞により結ばれた文の中のИЖЕがやがて関係従属節を導く関係詞としてのИЖЕとなったと考えられている。[5]

一方、関係詞КОТОРЫИの来源するところについては、一致した見解は得られていない。例えば、Сумкина(1954)[6]は、КОТОРЫИは、元来、疑問詞であり、КОТОРЫИによって形成される関係従属文は、疑問文と答えの文が結合したものと考えられるとする一方で、疑問詞の持つ不定的な意味が具体化したとも考えられるとしている。又、Ickler(1981)は不定代名詞詞的な意味から関係詞の用法が派生してきたとしている。[7]

両者が、関係詞として使用され出した時期については、文献上の制限もあり、明確にはしえないが、[8]これら来源の異なる関係詞がロシア語史上で一時期は共存し、やがて、КОТОРЫИのみへと、その関係詞としての機能を移行させた。

次の例は、古代ロシア語による最古の文献「オストロミールの福音書」[9]と、現代ロシア語による福音書の対応する箇所である。

例４．Въскрьсь ІІс. за оутра въ пьрвы сѫботы. явися прьжде Марии Магдалынѥ. Из ѥѥиѧ же изгъна седмь бъсъ. /Ост. Мар., 16-9/

「マグダラのマリア」 f.sg.D. prp.+G 「-から」 ИЖЕ f.sg.G.

例５．Воскреснув рано в первый день недели, Иисус явился сперва Марии Магдалине, из которой изгнал семь бесов. /Биб./

「マグダラのマリア」 f.sg.D. prp.+G 「-から」 КОТОРЫЙ f.sg.G.

「週のはじめの日の朝早く、イエスは、かつて七つの悪魔を（その女から）追い出してやったマグダラのマリヤにまず姿をあらわされた。」

ここでみる限りでは、二つの関係詞の統語的環境は同じであり、ИЖЕからКОТОРЫИへと関係詞が置き変わったようにみてとれるが、事情はそれほど単純ではない。確かに古代ロシア語において、ИЖЕは、16～17世紀までの残存している文献、特に文学作品や年代記、宗教的文献において非常によく使われており、一方のКОТОРЫИは、それと比較して文献にみる限りでは、生起の頻度は低い。とはいえ、古代ロシア語における早い時期においてさえ、[10]関係詞としてのКОТОРЫИの使用がみられるのである。こういった点が古代ロシア語の主要な関係詞ИЖЕとКОТОРЫИの関係を複雑にしている。

次章より、16世紀の文献について両者の分布を調べ、その関わりを検討していきたい。

2．調査の対象とした文献について

2.1. 文献を選ぶにあたって

ИЖЕとКОТОРЫИの分布について、従来、次の二点が指摘されている。

i) 文献の性格について

①宗教的色彩の濃い文献（例えば、聖書外典、聖者伝、高雅な文体を志向して書かれた英雄伝など）においては、専らИЖЕが使われること。

②世俗的色彩の濃い文献（例えば、法典文、訴状、私信等）においては、専らКОТОРЫИが使われること。

ii) 文献の年代について

①15～16世紀辺りからКОТОРЫИがИЖЕの分布域を侵して多用されるようになってきたこと。

以上の点は、筆者が概観した諸文献[11] についても傾向としては正しいと思われる。しかしながら、これだけの指摘では両者の関係が余りにも不明瞭である。多用されていたИЖЕがКОТОРЫИにその分布を譲る過程においてどの様な状況にあったのか。両者の間に機能の分担ということは起こらなかったのか。こういった疑問に対して、i)、ii)は、多くを示しているとは言い難い。そこで、これらの疑問を明らかにするために、i) 、ii) に基づいてИЖЕとКОТОРЫИについて更に詳しい調査をすれば、 各々についてその機能をより明確にすることができる。調査の対象としては、多様な性格の文献を求め得、二つの関係詞が競合状態にあったと考えられる16世紀ごろの文献が最も適していると考える。又、16世紀は、統一文章語が成立を見る17世紀の前夜として、大きく分けて二つの文章語の並存状態にあったといえる。即ち、民衆口俗語に基を置く文章語と教会文語に基をおく文章語の二つである。上のi)にあるように、文献の性格が二つの関係詞の生起にある程度、関与するのであれば、このように動的な言語状況にある時代の文献は興味深い。調査文献としては、なるべく、ジャンルの異なるものを選んだ。

2.2. 調査対象とした文献

調査の対象として、次の六点を選んだ。選択にあたって、ジャンル、文体、作者・作品に対する評価などについては、 Винокур(1945), Ларин(1975), Лихачев(1980), Филин(1981)を主に参考にした。文献名の後の [] は、例文出典の際の略号とする。各文献の分量については、付表Bを参照。

①マキシム・グレクの著作より

i) 幸福についての手紙 [М.Г., Пос. о Фор.]

ii) サボナロールの話 [М.Г., Пов. о Сав.]

マキシム・グレクМаксим Грек(俗名 Михаил-Максим Триволис)は、1470年ごろアルバニアで生まれ、1550年代にロシアで客死。1492年頃からイタリアに住み、アフォンで得度した修道僧。1518年、大公ワシーリーⅢ世の招きに応じてモスクワへ来て、著作、翻訳に従事した。トベリにて死す。文体は、文学的、文語的で、口語的な要素はみられない。i)は、宛名は不明。16世紀ロシアで人気を博していた占星術、運命論をテーマとした手紙で、後のнестяжатель「禁欲主義者」の運動につながる活動を行っていた著者の目からみた、これら流行への批判的な意見が書かれている。ii) は、著者がイタリア滞在中、最も影響をうけたサボナロールについての話である。その活動と悲業の死の詳細な記述がなされている。僧侶の生活への言及が多いので、宗教的色彩の濃い作品となっている。調査に使ったテキストは、Памятники Литературы Древней Руси［以下、ПЛДРと略す］(1984)収録のもの。

②カザン史 Казанская История ［К.И.］

金帳汗国成立から1552年のイワン雷帝によるカザン汗国征服までを描いた歴史小説。軍記物である。作者は未詳。成立は、1564年－1566年とされている(Лихачев (ред.))。作中で作者が自分について、「二十年間カザンにあって皇帝に仕えた。」としているが、実際、どういう背景で成立したのかはよくわからない。Ларин(1975：p.252)によると、文体は、レトリックを駆使して高雅な文体を志向しているが随所に俗語の要素がみられるという。16世紀に特徴的である文学作品のジャンルの多様化に応じるため、調査文献とした。使用したテキストは、ПЛДР(1985)に収録のもの。他にПолное собрание русских летописей (ПСРИ) т.19より、Ⅰ. История о Казанскомъ Царствѣ をも参照した。

③イワン雷帝からクルプスキー公への手紙［Пос., Кур.］

イワン雷帝 Иван Грозный (1530～1584年)とアンドレイ・クルプスキー公Андрей Курбский (1583年没) との間にかわされた往復書簡の一つである。1564年にイワン雷帝からクルプスキー公に宛てた返書であり、Первое Послание Ивана Грозного Курбскому「イワン雷帝からクルプスキーへの第一の手紙」として、写本によって広く普及している著作である。元選抜者会議の成員であったクルプスキー公が、リボニア側についたことを非難した手紙である。この文献は、私信の性質は持たず、帝が、逆臣に対して怒りを表して、国家の威信を示すための文書として書かれている。 使用したテキストは、Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским, 1979 より、Первое Послание Ивана Грозного Курбскому(いわゆる1-я пространная редакция)。尚、ПЛДР(1986)の中で<...>で示されている聖書からの引用部分については、

調査の対象とはしなかった。

④イワン雷帝の手紙

i) 英国女王エリザベスⅠ世への手紙(1570年)[Пос. Елиз.]

ii) スウェーデン王ヨハンⅢ世への手紙(1573年)[Пос. Иог.Ⅲ]

iii) キリル・ベロゼルスキー修道院への手紙(1573年)[Пос. Кир.-Бел.]

iv) シメオン・ベクブラトービッチへの手紙(1575年)[Пос. С. Бек.]

v) ポルヴェンスキーへの手紙(1577年)[Пос. Пол.]

vi) ヤン・ホドケービッチへの手紙(1577年)[Пос. Я. Ход.]

vii) ポーランド王ステファン・バトーリーへの手紙(1581年)[Пос. С. Бат.]

イワン雷帝がその治世の間に外交文書としてものした書簡が残っている。相手によって(誰に宛てられた手紙であるかによって)ИЖЕとКОТОРЬИの分布が違っていた。文献の列挙の順は、使用したテキストПослание Ивана Грозного(1951)に収録されている順にしたがった。但し、今回の調査に関して分量的に有意でないと考えられるものは、対象から除外した。聖書からの引用部分は、文献③の扱いに同じ。

尚、文献③と④は、同じくイワン雷帝の手紙であるが、③の占める量的な、又、文学作品としての評価の優位であることを考慮して、別の文献とした。この書簡集を選んだのは、同一の人物におけるИЖЕ、КОТОРЬИの使用状況を確認したかったからである。

⑤家庭訓 Домострой [Дом.]

「家庭訓」は、15世紀から16世紀古代ロシアにおいて汎く行きわたっていた慣習、道徳概念の集大成とも言うべき編纂本である。編者は、ノブゴロド出身の高僧シリベストルСильвестр (16世紀初－1568年)。内容は、国家の長をツァーリ(帝)とするなら家庭の長は一家の男主人とする家父長制を肯定する教えに則したものである。全64章からなり、信仰についての教えの章(前半25章まで)と、家計等、日常生活のことについての章(後半26章から63章まで)と、おそらくは、編者シリベストルが著したと思われる子への教えの章(64章)の3つの部分からなる。今回の調査においては、25章までと64章を、宗教的文献、又、26章から63章までは、卑近な内容を持つので世俗的な文献と見なした。テキストは、ПЛДР(1985)収録のもの(ГПБ. Q. XⅧ, 149, л.1-л.124:いわゆるコンシン本)を使用した。編者シリベストルは、文献③の書簡の宛てられたクルプスキー公と同じく、イワン雷帝の側近であったが、後に失寵にあった。成立は定かではないが、16世紀中葉には成立していたとされている。

⑥1550年の法典 Судебник 1550 года [Суд.]

「1550年の法典」は、イワン雷帝の時代に発布された100条から成る法典。編纂は、選抜者会議により、各地に発布された。膨大な量の写しが残っているが、写本間に相違は余り見られない(СудебникиXV-XVI веков:p.114)。今回の調査では、いわゆる事務文体деловой стильの代表として選んだ。古代ロシアにおいては、法典は簡潔な文章で分かりやすく書かれていた。テキストは、СудебникиXV-XVI веков(1952)に収録のもの。(16世紀60年代初めの写本による。)

3. 調査結果

前章で選んだ文献について、まずИЖЕとКОТОРЫИを、その用法に関わらず抽出した。

3.1. ИЖЕとКОТОРЫИの分布

ИЖЕとКОТОРЫИの用法には、1章にあげた関係詞としての用法とは異なるものもみられる。しかしながら、表1にあらわれているように、文献によって、ИЖЕとКОТОРЫИが用法に関わらず、使い分けられているのがみてとれる。それら諸用法には、関係詞と関連する点が少なからずみうけられることから、ここでは、関係詞としての用法及びその変則的な用法に加えて、ИЖЕとКОТОРЫИの形式をとるものを原則としてすべて調査対象とした。[12]

表1. ИЖЕとКОТОРЫИの分布

	①	②	③	④	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	⑤	前	後	⑥	計
ИЖЕ	110	187	166	62	-	-	25	-	32	4	1	20	20	-	-	545
КОТОРЫИ	-	7	6	89	9	20	5	5	3	1	46	52	8	44	162	316

3.2. 関係詞ИЖЕとКОТОРЫИ

関係詞としてのИЖЕとКОТОРЫИは、文献によりほぼ分布を異にし、一つの文献において両者が等しく拮抗状態にあるものはない。ИЖЕとКОТОРЫИについてここで注意を引くのは、ИЖЕが専ら使用されている文献において、少数ではあるがКОТОРЫИが見られるという点である。このことは、文献の文体、二種の文章語の併用状況との関わりにおけるИЖЕとКОТОРЫИの関係について情報を与えてくれる。この点については、4章においてデータに基づいた考察を行いたい。

3.3. 変則的なИЖЕとКОТОРЫЙ

文献を詳細に調べて行くと、ИЖЕ及びКОТОРЫЙの各々について関係詞とは、語義・語法上、異なるものや、関係詞の変則的な用法と思われるものが観察された。本節では、そのような、ИЖЕ及びКОТОРЫЙについて報告する。（後掲の表２、表３参照。）

3.3.1. 変則的なИЖЕの諸用法

i）接続詞として機能するИЖЕ

ИЖЕには、文脈によって様々な意味に解釈し得る接続詞として使われているものがある。その形式としては、関係詞の主格・対格にあたる形式が専ら使われる。ежеが最も多く、ついで、ижеが、比較的多数であった。ここには、比較的多くみられたもののみをあげる。[13]

例６．,удержи языкъ свои от зла и устне свои, еже не глаголати

「-するように」 「言う」 inf.

льсти, храни себе ото лжа и от похвалы, и от клеветы, и самъ ни в чемъ не величайся; /Дом., гл. 64/

「己の舌と唇を嘘を言わぬように、しっかりとおさえていよ。偽りや自惚れや中傷にかかわるな。そして自分では何らつまらぬことをしゃべるな。」

例７．Сынъ или дщерь, не послушьливы отцу или матери, в пагубу имь будьть, и не поживуть дней своихъ, иже прогнѣвают отца и

「もしも-すれば」 「立腹させる」 pres.pl.3

досажають матери. /Дом., гл. 18/

「怒らせる」 pres.pf.3

「父や母に従順でない息子や娘は、もしも父を怒らせたり、母を立腹させたりすれば身を滅ぼし、生命を全うできまい。」

ii）名辞化のИЖЕ

ИЖЕには、不定詞に付加したり、節を導いたりして、文中において名詞的働きをする句や節を形成する用法がある。各々の例はすぐ後に示すが、この用法について興味深いのは、次の二点である。

①不定詞を従えるИЖЕは余剰的であるという点。

②名詞節を導くИЖЕは、接続詞ЧТО、即ち、КОТОРЫЙの優勢である文章語において名詞節を導く接続詞として多用されるЧТОに相当するという点。

いずれも、16世紀以降、統一文章語の成立を経て現代ロシア語へ続くロシア語史上、やがて消失していくИЖЕが、この時代において既に周辺的となっ

ていることを示している。各々の例をあげる。

例８．不定詞に付加する例[15]

Мнѣ же еже жити — Христос есть, и еже умрети —

「こと」「生きる」inf.　　「こと」「死ぬ」inf.

приобрьтение.　/М.Г., Пов. о Сав./

「私にとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは獲得である。」

例９．名詞節を導くИЖЕ

Ино се ли сопротивно разуму, еже не восхотехом в совершенем

「これ」　「こと」

возрасте младенцем быти?　/Пос. Кур., л. 316 об./

「すると、成年になってから、幼児でありたくないと思うのは、分別に反しているであろうか。」[16]

例９は、先にあげた②との関連で特に注意を引く例である。この例は、名辞化のИЖЕを用いて、се～еже･･･、即ち、се「これ」＝еже以下の節という構文を形成していると考えられる。ここで注目すべきは次の点である。即ち、当時のИЖЕが多用されない方の文章語においては名詞節を導くのは、ЧТОであり(例１０参照)、СЕが専ら、教会スラヴ語に基をおいた文章語において使われていることを考えるとСЕ～ЕЖЕ･･･は、民衆口俗語調の文章語において同じ機能を担うТО～ЧТО･･･(例１０)の構文に対応する表現であるという点である。

例１０．И то знатно, что твои панове рада всю землю наводят на

「こと」

кроворазлитие хрестьянское, жедаючи крови разливати хрестьянские.

/Пос. С. Бат./

「おまえの近臣達は、キリスト教徒の血を流そうとして、おまえの領地にキリスト教徒の流血沙汰を起こそうと企んでいるということは、わかっている。」

СЕ～ЕЖЕ･･･の構文は、文献③クルプスキーへの手紙において多用されており、書き手であるイワン雷帝独自の文体であったとも考えられる。即ち、イワン雷帝が、一方の文章語（民衆口俗語に基礎をおいたとされる文章語）から、高雅さを強調するために用いた文章語（教会スラヴ語に基礎を置いたとされる文章語）に借用したのではないかとも考えられる。このことは、i)の接続詞的用法と併せて考えると、ИЖЕが、後者の文章語に置いて前者の文章語に対応する機能を多く担わされていることを表している。そのため、ИЖЕの用法は曖昧さが増す傾向にあったと言えるであろう。

iii) 「枠構造」のИЖЕ

まず、例を参照されたい。

例１１．И тамо ему в заточении и кончавшуся, царица же гневом неутолима сущи и еже на прекормление убозей сей остави виноград, восхоте злохитрьством отняти. /Пос. Кир.-Бел./

「葡萄園」
m.sg.A.

「そして、彼は幽閉されて死んだが、皇妃は怒りを抑えきれず、かの人が生活の資として残した貧しい葡萄園を卑怯な手で奪うことを欲した。」

この用法は、ロシア語における関係従属文の一般的な語順としての《先行詞ИЖЕ･･･関係節･･･》という語順を、《ИЖЕ･･･修飾部（関係節）･･･被修飾語（先行詞）》という語順に変えたものとなっている。この用法については、他の用法と関連させて次章で考察を加えたい。

iv) 連辞省略のИЖЕ

この用法のИЖЕは、実質的な意味を持たないよう思われるИЖЕである。次例参照。

例１２．И пакы тьй же въ послании, еже къ еврьомъ: "Учении

「手紙」 ИЖЕ
n.sg.P. n.sg.N.

различными и чюжыми не скытайтеся". /М.Г., Пос. о Фор./

「そして、その人は再び、ユダヤ人への手紙に、『異なった見知らぬ教えに心惹かれては行けない。』（と書いた）。」

この用法は、関係詞のタイプi)において、関係節中の述語動詞である連辞が省略されたものと考えられる。しかしながら、《被修飾語＋修飾部（前置詞句）》という結合が古代ロシア語において一般的であることを考えると、この用法のИЖЕは、名辞化用法のИЖЕの同様（例８参照）、余剰的なИЖЕだといえる。この用法には、次のように《被修飾語（先行詞），ИЖЕ･･･形容詞相当語（句）》の場合もある。

例１３．, обдалаяй всею вселенною, постави брата своего Пруса,

「兄弟」 「自分の」 「プルス」
m.sg.A. m.sg.A. m.sg.A.

иже вышепомянутый. /Пос. Пол./

ИЖЕ 「上に述べられた」
m.sg.N. PPP.m.sg.N.

「彼は、ありとあらゆる地を領有していて、上に述べられた自分の弟のプルスを据えた。」

iv) の用法と関連して、次のような用法がある。

v) iv) の更に変則的な用法のИЖЕ

まず例を参照されたい。

例１４．:младенца　　же　　нашего, еже от　　бога　　даннаго

「幼児」　「(強意の助辞)」「我々の」　prp.+G「神」　「与えられた」
m.sg.A.　　m.sg.A.　「-から」m.sg.G　PPP.
m.sg.A.

нам,　хотеша подобно Ироду погубити, воцарив князя Володимера.

prn.
1.pl.D.

/Пос. Кур., л.317-л.317 об./[17]

「神から下された我々の年端の行かぬ子を、ボロジーミル公を擁立しヘロデ王のように、亡きものにしようと彼らは欲した。」

例１４は、iv) の連辞省略の用法とその生起の環境が相似しているが、先行詞の格に、ИЖЕ（ここではеже）以下の主格補語にあたる形式が一致しているのが特徴的である。これを図示すると、本来なら

---　先行詞　，ИЖЕ--連辞--主格補語 ［格形式ｉ］　　［主格形］

となるべきところが、

---　先行詞　，ИЖЕ--連辞--(主格)補語 ［格形式ｉ］　［省略］　［格形式ｉ］

となっている。[18] この用法は、関係詞ИЖЕが余剰的になる場合があることをやはり示している。次章で更に考察を加える。

3.3.2.　変則的なКОТОРЫИ

i) 不定代名詞のКОТОРЫИ[19]

ИЖЕに比べてКОТОРЫИの方は、変則的な（周辺的な）用法を多く持たない。しかしながら、関係代名詞のКОТОРЫИと密接なつながりがあると考えられる不定代名詞としての用法がある。

例１５．A которые жалобницы заданы судьям и оба истца до суда

КОТОРЫИ「訴訟」
f.pl.N　f.pl.N.

помирятся, и по тем　　жалобницам судьям пошлин не имати ж.

「その」　f.pl.D.
f.pl.D.

/Суд., ст.31/

「裁判に付された訴訟で、双方が裁判までに和解したら、これらの訴訟については民事官は、科料を徴収してはならない。」

КОТОРЫИがこの用法の不定代名詞として使用される頻度は非常に高い。又、この用法は、ИЖЕの先行詞をとらない関係代名詞の用法と意味上は同じ機能を果たす節を形成することもある。次のような例にみる用法である。

例１６．И которые похотят к нам, и ты б, государь, милость

КОТОРЫИ
m.pl.N.

показал, ослободил им быти у нас безопально, и от нас их имати не

prn.
m.pl.D.

prn.
m.pl.A.

велел. /Пос. С. Бек./

「当方に居りたいと思う者達には、公よ、慈悲をかけ、失寵させることなく彼らを当方に滞在させ、（彼らを）こちらから連行するのはやめてもらいたい。」

この用法は、従属複雑文である関係詞を含む文とは次の点で統語法上、大きく異なる。即ち、

①不定代名詞を含んで形成される文とそれに続く文が並置の接続詞《例１５、１６においては、И「そして」》でつながれている点。

②不定代名詞によって形成される文において同定される人や事物が、後置される文中で（代)名詞で置き換えられている《例１６においては、которые похотят к нам「当方に居りたいと思う者達」を、им, их「彼ら」(pl.D., pl. A.)で置き換えている。》点。[20]

これらの点はあるものの、不定代名詞КОТОРЫИを含んで先行する文は、後行する文と結合して、一つのまとまった意味、即ち、条件・帰結の意味を表すので、この用法は、通常の、並置接続詞によって導かれる文の結び付きよりも、従属接続詞によって形成される従属複雑文の結び付きに近い。この用法については、次章で、関係代名詞としてのКОТОРЫИと関連させて更に検討したい。

ii) 疑問詞としてのКОТОРЫИ

これには、特にこの時代に特徴的と思われる用法はなかった。二例をあげるにとどめる。

例１７．А опричь Москвы и Великаго Новагорода и Пскова инде нигде ни в которых городех отпускных не давати. /Суд., ст. 77/

КОТОРЫИ 「町」
m.pl.P. m.pl.P.

「モスクワ、大ノヴゴロド、プスコフを除くほかのどの町においても、自由身分証を与えてはならない。」

例１８．Ведь коли ровно, ино то и братьство, а коли не ровно, которому братьству быти? — ино то иноческаго житиия нет.

КОТОРЬИ 「同胞意識」
n.sg.D. n.sg.D.

/Пос. Кир.-Бел./

「実際、平等であれば、同胞意識が湧く、が、平等でなければ、どんな同胞意識があろうか。つまりは、そんなことでは僧侶の生活はない。」

４．考察

前章で、16世紀の文献をいくつか調べた結果、得られたИЖЕとКОТОРЬИの用法を報告してきた。本章では、これらに基づき、関係詞ИЖЕとКОТОРЬИの分布について検討し、文体（文献の性格による文章語の種類）との関わりにおけるИЖЕとКОТОРЬИの関係を探り（§４.１.）、次に、§３.３.に基づき、ИЖЕとКОТОРЬИの各々の変容について検討し、それらが関係詞の変遷に及ぼす影響を探る（§４.２.）。

４.１. 関係詞ИЖЕとКОТОРЬИの分布

ИЖЕとКОТОРЬИは、古代ロシア語において、関係詞としての用法で多用される。これらの関係詞がどの様に分布しているか、又、その環境を決定するものがあるのか否かについて、文献①～⑥から得たデータを基に考察する。

表１にみられるとおり、ИЖЕとКОТОРЬИの分布は、文献によって異なり、一つの文献において両者が等しく拮抗している文献はない。しかしながら、若干数ではあるが、ИЖЕの環境にКОТОРЬИが生起している場合がある。それらを詳しくみていくことにより、二つの関係詞のうちやがてКОТОРЬИが優勢になっていく発端を明らかにできるのではないだろうか。

関係詞ИЖЕとКОТОРЬИの混用が見られるのは、文献②、③、④iii)、④v)、⑤の４点においてである。以前の、混用のきわめて少ない文献群を考えると、ИЖЕとКОТОРУИの同一文献上の混用が、16世紀の古代ロシアの二つの文章語の混成による統一文章語成立の萌芽を反映する一事象と考えられよう。次の例を見られたい。

例１９．И тако князь Василей и князь Иван Шуйские самовольством у меня в бережении учинилися, и тако воцаришася; а тех всех,

「為す」 pf.p. 「国を治める」 aor.pl.3 「あれらの」 m.pl.A. 「すべての人」 m.pl.A.

которые отцу нашему и матери нашей были главные изменники, ис

КОТОРЫИ
m.pl.N.

понимания их выпускали и к себе их примирили. /Пос. Кур., л.313/

「かくして、ワシーリー、イワンの両シュイスキー公等は、私の後見人として専横に振舞い、国を治めたのだ。；私の父や母にとって裏切り者であった全ての人物を幽閉から解き、自分達の味方に引き入れたのだ。」

上例は、文献③クルプスキーへの手紙からの例である。Лихачев(1951:p.465)によると、イワン雷帝の文体は、教会スラヴ語調で格調高く始められていても、やがては、民衆口俗語調になり、文体の混合がみられるのが特徴的であるとされている。この書簡において雷帝は、随所で古い統語的範疇[21]を残して書いているが、例えば、例１９では、アオリストや完了分詞のみによる過去形を混用したり、双数を消失していたりする点に民衆口俗語の要素が観察される。КОТОРЫИの使用も、この口俗語の要素の一つとなっていると思われる。このКОТОРЫИの先行詞は、二例とも強い非難の対象であり、ИЖЕの専ら使用される環境におけるКОТОРЫИの出現を特徴付けている。[22]

文献⑤家庭訓は、64章から成る編纂本であり、章の内容（宗教的記述を含むか、家計についてなどの世俗的記述を含むか）によって、ИЖЕとКОТОРЫИの使い分けが明らかにみられる。従ってこの文献では、両者が混合しているとは言えないかも知れない。しかしながら、編纂本とはいえ、編者シリベストルも、また、読者も一編の書物の中にИЖЕ及びКОТОРЫИの各々が、の専ら使われる環境の併存を認めていたという事実は重要である。そのことは、編者の意識的な使い分けがあったと推定する根拠となる。ИЖЕとКОТОРЫИ各々の分布が全章を通じて同一章内での混合を一切見せず分けられていたことは、ИЖЕとКОТОРЫИの各々生起する環境の文体的機能が分担された状況（即ち、章の内容から察するに、前者は宗教的色彩を付加し、後者は世俗的色彩を付加するという点）にあったことを伺わせる。

さて、上でみてきたように、関係詞ИЖЕの多用される環境において現れる関係詞КОТОРЫИは、分布の特徴を、文章語と関連させてある程度説明することができた。一方、調査した文献にみる限り、関係詞КОТОРЫИの多用される環境において関係詞ИЖЕが現れることは、皆無に等しい。[23]その点からすれば、関係詞ИЖЕの多用される環境（文体）の方が、筆者(16世紀の)にとって、より意識的に使われていたものだったのではないかと推察される。ИЖЕとКОТОРЫИが、必ずしも、16世紀のこれら二つの文章語を代表する単語であるとはいえないであろう。しかしながら、両者が、これら文章語に各々属してい

たと考えられるとすれば、関係詞ИЖЕとКОТОРЫИは、二つの文章語が、所与の文献においてどのような混在状態にあるかに応じて、その生起が左右されると考えてもいいだろう。

4.2. ИЖЕ及びКОТОРЫИの変容

本稿で報告したデータは、関係詞の、ИЖЕからКОТОРЫИへという変遷において、ИЖЕとКОТОРЫИの各々についても、それら各々の変容をたどるための情報を提供してくれる。16世紀の共時的様相から見いだせる、ИЖЕについては消失の、そしてКОТОРЫИについては現代ロシア語に至るまでの、各々の変容の方向は、ИЖЕからКОТОРЫЙという関係詞の変遷におおいに関与すると思われる。

4.2.1. ИЖЕの変容

関係詞ИЖЕについては、その変容を伺わせる点として、まず、先行詞との性・数における一致を欠く例がみられるという点である。この点については、既に指摘されている。例えば、Кершиене(1979)によれば、先行詞と性・数において一致しない関係詞ИЖЕは、14世紀までの文献に比較して、15～17世紀の文献においては急増しており、どの形式の代わりにどの形式を使うか（例えば、яжеの代わりにижеを使う、等といった規則性）は、同一の書き手においてさえ一定ではないという。今回の調査においてもこの指摘は裏付けられた。どの形式の代わりにどの形式を使うというきまりはないものの、емужеや、имжe等、斜格形が、本来所与の先行詞と一致する形式の代替形として使われることは、これらのデータにおいて見る限りでは見あたらない。ИЖЕの主格形を構成する、и(иже=и+же)、я(яже=я+же)、е(еже=е+же)は、当時の指示代名詞のパラダイムからすでに外れてしまっている（各々、онъ、она、оно にかわっている）が、ИЖЕの斜格形は、指示代名詞の斜格形と同じ形式によって構成されている。そのため、斜格形は、書き手に格を意識させ、先行詞と性や数における一致を欠くИЖЕの代替形にはならなかったものと考えられる。逆にいえば、иже、яже、еже が、徐々に性・数の区別を書き手に厳密に意識させなくなっていることを意味しており、これらが関係詞としての役割を逸脱しつつあることを示している。Кершиене(1979)は、この点について、ИЖЕは、15－17世紀の書き手達によって、限定部分と被限定部分を結び付ける補助的な不変化詞として考えられており、既に、接続詞的語句КОТОРЫИと同じものとは見なされていなかったと考えている(p.100)。

今回の調査からみると、ИЖЕはКОТОРЫИとは生起する文体上の環境は異なるとはいえ、関係詞という機能については等しい単語として、未だ十二分に使用されてはいたが、徐々に補助的な用法でも使われ出していることがみてと

れる。それらは、ИЖЕという単語の変容を示唆している。ИЖЕはやがて使用されなくなるが、ИЖЕの変容は、この消失をある程度説明するものと期待できる。例を挙げて、ИЖЕの消失を促したと考えられる事象について具体的に考察する。

例２０．И онъ, възлюбивъ ихъ съвѣтъ и изволение, съ усрьдиемъ подьять иже по бозь сицевъ подвигъ. /М.Г., Пов. о Сав./

ИЖЕ　「このような」「奉仕活動」
m.sg.N.　m.sg.N.　m.sg.N.

「そして、彼は、彼らの取り決めと望みを愛でて神のためのこういった奉仕活動を衷心から行った。」

この例は、「枠構造」を形成するИЖЕである。この場合においては、前置詞句 по бозь「神のための」が、сицевъ подвигъ「こういった奉仕活動」を修飾し、по бозь сицевъ подвигъ「神のためのこういった奉仕活動」というまとまった句であることを示すためにИЖЕの存在が望ましかったのであろう。

ところが、例１３のように連辞省略のタイプの関係節で、関係節内に主格補語として形容詞相当語句がある場合は、ИЖЕの生起の必然性が低くなる。例１４にいたっては、主格補語にあたる形容詞相当語句が、先行詞にその格を一致させるので、ИЖЕの生起の必然性は尚一層低くなっていると思われる。

これら諸用例は、いずれも16世紀の文献にみられるものであるが、ИЖЕの担う機能が小さくなっているという点からИЖЕ消失の方向を伺わせる。修飾部に前置詞句がある場合と形容詞相当語句がある場合の各々について示す。

① 前置詞句が修飾部（関係節）にある場合

ИЖЕ－修飾部－被修飾辞　（枠構造）
（иже по бозь сицевъ подвигъ:例２０）

↓

被修飾辞－ИЖЕ－修飾部（連辞省略）
（въ послании, еже к еврьомъ:例１２）

↓

被修飾辞－（ИЖЕ→ゼロ）－修飾部
（例えば、король на Свейской земле「スウェーデンの地の王」／Пос. Иог. Ш／）

② 形容詞相当語句が修飾部（関係節）にある場合

被修飾辞－ИЖЕ－修飾部（主格補語） （格形式ｉ）　（格形式はｉにかかわらず主格） （брата своего Пруса, иже вышеромянутый:例１３

↓

被修飾辞－ИЖЕ－修飾部 （格形式ｉ）　（格形式ｉ） （младенца же нашего, еже от бога данного нам:例１４

↓

被修飾辞－（ИЖЕ→ゼロ）－修飾部 （格形式ｉ）　（格形式ｉ） （例えば、красныя девицы, живущия с нею в полать「彼女と共に宮殿に住んでいる美しい乙女達」／К.И., гл.38／）

余剰的なИЖЕが現れ、消失していく一方で、余剰的であるが故に先行詞との一致を欠く場合が増え、ИЖЕは、Кершиене(1979)が指摘するような修飾部と被修飾部をつなぐ補助的な単語と見なされる傾向にあったと考えられる。そして、そういった状況が、一致を守るИЖЕにも機能上の曖昧さを与えてしまっている。更に、§3.3.1.にあげた接続詞的用法のИЖЕが、その文脈による意味を多岐にわたらせていることもこれを助長している。これらにより、16世紀のロシア語において既に文体的特徴を付加されていると考えられる(§4.1.参照）ИЖЕは、ますますその傾向を強めていったのであろう。[23]

4.2.2. КОТОРЫИの変容

16世紀のロシア語でКОТОРЫИの諸用法のうち使用頻度が高いのは、§3.3.2.のi)であげた不定代名詞としての機能である。これは、ИЖЕの機能の一部（無先行詞の関係節を導く機能）と意味の上では同じ機能を果たす場合もあること（例１６参照）は、既に述べた。ところで、現代ロシア語においてはこの用法のКОТОРЫИはみられない。それでは、古代ロシア語における不定代名詞の機能（以下、特に断わらない限り不定代名詞のКОТОРЫИとは、§3.3.2.のi）のКОТОРЫИを指すこととする。）は、現代ロシア語では何によって担われているのか、という疑問が生じてくる。又、ИЖЕが消失して行くにつれて、ИЖЕの果たしていた関係詞としての機能がКОТОРЫИによってかなりの部分が代替されるとすれば、そのことはКОТОРЫИのこの変容になんらかの関わりがあ

るのではないか。

16世紀のロシア語においては、КОТОРЫИは不定代名詞と関係代名詞としての二つの用法を併存させていたが、現代ロシア語では、関係代名詞としての用法でしか現れない。[25] これを図示する。

古代ロシア語

КОТОРЫИ－被同定辞，И－ТОТ－被同定辞

（例１５）

i）КОТОРЫИ－被同定辞，И－（指示）代名詞

（例１６）

ii）－先行詞，КОТОРЫИ……

（関係詞КОТОРЫИ）

：

現代ロシア語

－先行詞，КОТОРЫЙ……

（関係詞КОТОРЫЙ：例２１，２２，２３）

現代ロシア語のКОТОРЫЙの例をあげる。

例２１．Цветухин шел в том состоянии, которое можно назвать

「その」 「状態」 КОТОРЫЙ
m.sg.P. n.sg.P. n.sg.A.

бездумьем. /Грам., '80, § 2905/

「ツベトゥヒンは、無思索といってよい状態になった。」

例２２．Нынче те, которые больше всех и в самом деле скучают,

「あれらの人々」 КОТОРЫЙ
m.pl.N. m.pl.N.

стараются скрыть это несчастье как порок. /Грам., '80, § 2925/

「今や、誰よりも実際退屈している人々がこの不幸を罪悪のように隠そうとしている。」

例２３．Человек, который знающий свое дело ... который и сам

「人間」 КОТОРЫЙ КОТОРЫЙ
m.sg.N. m.sg.N. m.sg.N.

сыт и лошадь сыта, завсегда покоен ... /Чех., Тоска/

「己のことをしっかりやっている人間は、･･･ 自分の腹もいっぱいで、馬も満腹している（人間）なら、（その人間は）いつも何もいうことはないさ･･･。」

上図の古代ロシア語のi）に対応すると考えられるのは、例２２、例２３の

ようにКОТОРЫЙによって導かれる関係節が主節に埋め込まれた文である。

現代ロシア語からさかのぼって、消失してしまった 不定代名詞のКОТОРЫИの用法の代替形を考えるに際して注目すべき点は次の三点である。

①並列の接続詞及び被同定辞の同一の名詞や（指示）代名詞による繰り返しの消失。つまり、現代ロシア語においてКОТОРЫЙは、従属複雑文を形成する接続詞的語句である。

②現代ロシア語において、КОТОРЫЙによって導かれる文に条件・帰結のニュアンスがでることがあること。

③関係詞КОТОРЫЙの先行詞となる名詞に指示詞ТОТが付加すること。

①は、統語法上かなり大きな変化である。古代ロシア語において、不定代名詞のКОТОРЫИによって形成される半従属複雑文ともいうべき文においては、КОТОРЫИは不定代名詞としての機能と関係代名詞としての機能を合わせ持っていたが、前者の機能が後者の用法によって担われるようになったと思われる。

16世紀の文献においては、関係詞としてのКОТОРЫИの用法が、民衆口俗語に基をおく文章語が優勢となってくるにつれて、定着しつつあった。それにより《先行詞，КОТОРЫИ》の語結合（つながり）が一般的となった。そのことが、不定代名詞のКОТОРЫЙが果たす機能が例２２、例２３にみるような形式にとってかわられるという状況を引き起し、やがて不定代名詞としてのКОТОРЫИの用法が失われることになったと考えることは可能であろう。

②については、主節に埋め込まれたКОТОРЫИの導く節による文において、条件・帰結のニュアンスが出ることがある（例２３参照）のは古代ロシア語の不定代名詞による並置の文の意味を継承していると考えたい。

③については、現代ロシア語においてКОТОРЫИによって導かれる従属節が修飾する先行詞に指示詞 ТОТ「その」が付加している場合がよく見られることに注目したい(例２１)。このТОТは、古代ロシア語の不定代名詞を含む文に後置される文の中で、繰り返される被同定辞に付加していたТОТ（例１５）の名残りではないだろうか。現代ロシア語においては、ТОТは、КОТОРЫЙによって導かれる関係従属節と先行詞の結びつきを強める役割を果たすとされている。《ТОТ先行詞，КОТОРЫЙ》という環境にたつ先行詞となる名詞は比較的限定の度合が低い、即ち、「人」や「物」といった特定性が低いとも言うべき名詞が目立つ。例えば、тот человек，который･･･「･･･する人は」等。[26] このことは、不定代名詞КОТОРЫИが、本来、有している不定的な（即ち、特定性が低いという）性格を反映していると思われる。

以上、三点についての考察から古代ロシア語の不定代名詞のКОТОРЫИは、

その形成する文の意味機能の中和から関係代名詞のКОТОРЫИに統合されていったと考えられよう。

16世紀のデータは、ここでみた不定代名詞のКОТОРЫИと関係詞のКОТОРЫИの統合については、手がかりを与えてくれるにすぎない。しかしながら、その手がかりをもとに、現代ロシア語の関係詞КОТОРЫИの振舞いとあわせて、本節で行った考察は、КОТОРЫИの変容をある程度説明するものとなったと思う。この変容は、ロシア語史上の関係詞ИЖЕからКОТОРЫИへの変遷を、関係詞КОТОРЫИのカバーする機能が増えたという点で促すものと考えられる。

5．おわりに

古代ロシア語における主要な関係詞ИЖЕとКОТОРЫИは、ロシア語の歴史の上で、ИЖЕからКОТОРЫИという変遷を経た。本稿ではその変遷における、ИЖЕ、КОТОРЫИ両者の関係について、16世紀の文献を中心に調査及び考察を行った。まとめとして、今回の調査で明らかになった、ИЖЕとКОТОРЫИの機能の対応を下表に示す。

ИЖЕとКОТОРЫИの対応

<table>
<tr><th colspan="3">ИЖЕ</th><th colspan="3">КОТОРЫИ</th></tr>
<tr><td rowspan="4">関係詞</td><td rowspan="2">有先行詞</td><td>§3.2.</td><td rowspan="2">関係詞</td><td rowspan="2">有先行詞</td><td>§3.2.</td></tr>
<tr><td>連辞省略§3.3.1.-iv),v)</td><td>——</td></tr>
<tr><td colspan="2">無先行詞</td><td colspan="3">不定代名詞　§3.3.2.-i)</td></tr>
<tr><td colspan="2">「枠構造」</td><td>§3.3.1.-iii)</td><td colspan="3">——</td></tr>
<tr><td colspan="3">接続詞的用法　§3.3.1.-i)</td><td colspan="3">——</td></tr>
<tr><td colspan="3">名辞化用法　§3.3.1.-ii)</td><td colspan="3">——</td></tr>
<tr><td colspan="3">代名詞＋強意の助辞ЖЕ</td><td colspan="3">——</td></tr>
<tr><td colspan="3">——</td><td colspan="3">疑問代名詞　§3.3.2.-ii)</td></tr>
</table>

この対応状況を、ИЖЕからКОТОРЫИへの変遷の1ステージとすると、ここにおいて次の二点が大きく作用してくる。

①文献の性格、即ち、そこで使われている文章語の種類。

②ИЖЕ及びКОТОРЫИ各々の変容。

16世紀の文献においては、①も②も、ИЖЕからКОТОРЫИへという変遷を促す方向に作用している。16世紀のロシア語においては、二つの文章語併用状態からすでに民衆口俗語に基盤をおく文章語が優位となっていた。従ってその文章語に専ら現れるКОТОРЫИがИЖЕの関係詞としての領域を侵した。一方で、ИЖЕ

の有するその他の機能の多くは生起の必然性を失い、もしくは、民衆口俗語調の文章語におけるその対応形にとって代わられ、消失した。更に、古代ロシア語の文章語の統一の流れにおいて、関係詞として優勢となったКОТОРЫИが、多用されていた不定代名詞としての用法を、関係代名詞としての用法に統合する傾向にあった。そして、そのことによって、関係詞КОТОРЫИは、関係詞ИЖЕの機能を全面的に代替するものとなったと考えられる。関係代名詞のИЖЕは、17～18世紀において、又、わずかに19世紀の文学作品において、16世紀にすでにその傾向が顕著にみられた古風・典雅・教会スラヴ語風色彩をつけるという特別な意図を持ってのみ使用されるきわめて特殊な語彙となった。現代ロシア語においては、ИЖЕは、もはやそういった意図を持っても使われない。

註

1） 本稿でいう古代ロシア語とは、17世紀後半に国家統一語(национальный язык)の成立以前（11－17世紀）にロシアで使われていた言語を指す。

2） 従属複雑文（сложноподчиненное предложение）を形成する関係代名詞によって導かれる従属節を指す。Cf. Русская Грамматика, § 2755, § 2756.

3） 例文の表記は各例文の典拠［略号については、§2.2.参照］としたテキストの表記にしたがった。尚、ロシア語文中、ИЖЕ、КОТОРЫИの部分には、＿＿＿＿を、先行詞などには、＿＿＿＿を、又、ИЖЕ、もしくはКОТОРЫИによって導かれる節や句には、……を、原則として付した。必要に応じて、例文中の語句には逐語訳を付した。又、前置詞や動詞について、＋n格としてあるのは、「n格を要求する」の意とする。訳文中においては、例文に、なるべく対応するよう同じく下線を付した。その他、略語については、本稿末の付表Bを参照。

4） これらのうち、КОИは、人・事物を先行詞として、18世紀より19世紀にかけて広く使われた。16世紀の文献においても既に散見される。例えば、Казанская История (История о Казанскомъ Царствѣ)の、ПСРЛ19巻1においては、本稿で扱ったテキスト写本において、КОТОРЫИが使われている箇所にКОИを用いている箇所があり(л.118)、数量的には少ないが、КОТОРЫИの同義語といえる。КТО「誰」、ЧТО「何」は、13－14世紀から使用がみられる。数においては先行詞と一致しない。ЧТОは、活動体を先行詞にとることもあった。КТОは、次第に関係節を導く接続詞的語としては使われなくなり、ЧТОは、現代ロシア語では、主格及び対格の形式においてのみ使

われる。他に、КАКОВ「どのような」、ЧЕЙ「誰の」等が関係代名詞としてあった。いずれも、余り使用頻度は高くない。関係副詞としては、ГДЕ「どこに」、КУДА「どこへ」、ОТКУДА「どこから」、ИДЕЖЕ「どこで」、КОГДА「いつ」、ЯКО「どの様に」、ЕЛИКО「いかほど」等がある。

5） Буслаев(1959),Кершиене(1979),Корш(1877),Ломтев(1956),Сумкина(1954)その他。 但し、関係従属文としてのИЖЕによる文の成立過程については、見解の相違がある。

6） Сумкина(1954), pp.200-201参照。

7） Ickler(1981), §3.522参照。

8） 古代教会スラヴ語のもっとも古い時代の諸文献には、疑問代名詞に起源を持つとされる関係詞は、皆無といってよい(Бауэр:1967,§4.1)。尚、ИЖЕのИは、指示代名詞にさかのぼるとすれば、次のことが興味を引く。即ち、古代教会スラヴ語においては、指示代名詞のパラダイムとИЖЕのИのパラダイムは、単数主格形が、同じ形式をとっている。ところが、古代ロシア語においては、これらの形は、и(m.sg.N.)、я(f.sg.N.)、e(n.sg.N.)のかわりに、онь、она、оноという形をとって現れるのが普通となってきた。これは、и、я、e の形式が、パラダイムの中に同形のものをいくつか持っていたり、他にも同音異義語、例えば、и は、並列の接続詞「そして」と同じ形になるので起こったと考えられている。古代ロシア語でこの交替が起こっていた頃には、ИЖЕは、既に関係詞として成立していたのであろう。というのも、оньже、онаже、оноже という形は、皆無ではないが、普及はせず、иже、яже、ежеにおいて、依然としてи-、я-、e- が保存されていたからである。

又、スラヴ諸語の中において、ロシア語とは違い、現代チェコ語は、「どちらの」という疑問代名詞と同じ形式のkterýとともに、ИЖЕと同源と考えられるjenžが、関係代名詞として使われている。(Бауэр:1967)

9） 「オストロミールの福音書 Остромирово Евангелие」とは、補祭グリゴーリーが、1056年から1057年にブルガリア語のオリジナルからノブゴロドの長であったオストロミールのために、書き写した福音書である。この福音書には、多くの東スラヴ語の特徴が現れており（特に多くの無意識の書き写しの誤りは、東スラヴの音韻の特徴をあらわしている）、それまでの南スラヴの言語特徴を表している文献（古代教会スラヴ語による福音書など）と区分して、この福音書は、古代ロシア語の最古の文献として一般に考えられている。

10） 12世紀に成立したとされる Повесть временных лет「過ぎし年月の

物語」の中で関係詞としてのКОТОРЫИの使用がみられる。（Ломтев:1956, p.561参照)。又、Кершиене(1979:p.76)によると、Моление Даниила Заточника「ダニイル・ザトチニクの祈り」、Слово о полку Игореве「イーゴリ軍記」、Русская Правда「ロシア法典」には、ごく稀に接続詞的語句（関係詞）としての使用がみられる（１－２例ずつ）とされている。古代ロシアの文書грамотаにおいては（13世紀以降）多用されている。

１１）　参考文献Ⅱ参照。

１２）　明らかに代名詞＋強意の助辞ЖЕとわかるものについては除外した。

１３）　他に、КАК「-のように」やКОГДА「-の時」の意等になることもある。

１４）　対応する例と考えられるものをあげる。

, а то и сам написал еси, что король на Свейской земле

「それ」 n.sg.A.　　「-ということ」

отцом твоим.　/Пос. Иог. Ш/

「そしておまえは、己の父によってスウェーデンの地の王となったと、自分で書いてよこしたではないか。」

１５）　不定詞が、単独で、名詞として機能することは、一般的である。

１６）　この例では、ежеを「もしも・・・ならば」という条件を表す接続詞と考えることも可能である。訳文としては、「もし・・・であると思うとしたら、これは－－に反しているか。」。しかしながら、本稿では、注１４にあげたような例の借用として考える。

１７）　テキストでは、погубитиに続いて、(и како бы им не погубити!)「（そして、どうしてあいつらに亡きものにすることなどできようか!)」がある。

１８）　ちなみに文献③クルプスキーへの手紙の中では、先行詞－ИЖЕ－（主格）補語の組合せは、m.A.-еже-A., n.D.-еже-D., m.G.-иже-G., m.A.-иже-A., m.G.-еже-G.

１９）　КОТОРЫИには、§3.3.2.のi）の用法の不定代名詞の他に、条件・帰結の意を持たない不定代名詞がある。

例　, и выйдет тот холоп ис которые земли опять к Москве, и

f.sg.G.「地」f.sg.G.

он старому государю холоп по старому холопьству,　/Суд., ст.80/

「、そして、その奴隷が、某の地から再びモスクワへ戻って来ると、かつての雇用関係のもとに、かつての主人の奴隷となる、」

２０）　ちなみに、1550年の法典では、КОТОРЫИが形容詞的になんらかの名

詞に付加する不定代名詞として使われる例が81例みられ、そのうち、後続する文の中で、代名詞による繰り返し35例、名詞がそのまま繰り返されている例31例、異なった名詞で言い替えられて繰り返されているもの２例、繰り返しの無いもの（省略されていると考えられる例）13例であった。名詞による繰り返しのあるものは、文脈上、もし繰り返さなければ曖昧さが生じる恐れのある箇所が目立った。

２１）　クルプスキー公への手紙の中で、雷帝は、完了過去、不完了、アオリストなどを使っている。

２２）　クルプスキー公への手紙の中で、関係詞のКОТОРЫИが使われているのは、л.312、л.312об、л.313の３箇所であるが、Лурье(1951:p.225)によると、л.312-л.319обは、このクルプスキー公への第一の手紙の中でも、最も叙情的であり、個人の感情が入り、激した様子で書かれている、としている。関係詞КОТОРЫИの用例３例がここに集中していることは興味深い。

２３）　КОТОРЫИの多用される環境であるのに、ИЖЕが混在している例が１例だけあった。もっとも、それは、代名詞＋ЖЕの結びつきで先行する文とパラタクシスの関係にあるとも考えられ得る。文脈上も特に宗教的な記述のなされているところではない。

, а в ней про наше государство многие неправые слова писал

「多くの」「不当な」「ことば」
n.pl.A. n.pl.A. n.pl.A.

еси и нас укоряя, о них же несть нам потреба писати

+P. ИЖЕ
「-について」 n.pl.P.

подробну, ...　/Пос. С. Бат./

「その中には、我々の国家について多くの不当な言葉を書き、我々を非難したのだ。それらについては、詳しく書く必要もなかろう。」

２４）　１７世紀中葉に著された「司祭アバクウムの自伝 Жизнеописание Аввакума」においては、宗教的な記述にはИЖЕを、そうでないものには、КОТОРЫИの使用がみられる。下例参照。

Его же любит бог, того наказует;　/л.214 об./

ИЖЕ　「その者」
m.sg.A.　m.sg.A.

「神は、愛し給う者を罰されるのだ。」

Наипаче ж попы и бабы, которых унимал от блудни, вопят:

「僧」「と」「尼」　КОТОРЫИ
m.pl.N.　f.pl.N.　pl.A.

/л.202 об. - л.203/

「誰よりも、私がために淫らな行いをおさえられていた僧や尼達が、わめきました。」

２５）　現代ロシア語には、§3.3.2.のi)の不定代名詞としての用法は無いが、不定代名詞に次のような用法がある。

Который раз я спрашиваю.　　(Ожегов1988[20]:p.243)

КОТОРЫЙ 「度」
m.sg.A. m.sg.A.

「何度も私は、尋ねている。」

Которые рубята дома сидели, которые катались на коньках.

КОТОРЫЙ 「子供達」　　КОТОРЫЙ
m.pl.N. m.pl.N.　　m.pl.N. (同上)

「ある子供等は、家の中に居り、ある子供等は、馬に乗っていた。」

２６）　ここで言う「特定性が低い」というのは、固有名詞を最も特定性が高いとした場合、その反対に位置すると考えられる語彙を指す。例えば、発話において、修飾語をともなって生起する場合が多い語彙のことを指す。

付表Ａ　略語

A.=対格
aor.=アオリスト
D.=与格
f.=（文法）女性
G.=生格
I.=造格
m.=（文法）男性
N.=主格
n.=（文法）中性
P.=前置格
pf.p.=完了分詞
pl.=複数形
PPP.=分詞被動過去
prn.=代名詞
prp.=前置詞
sg.=単数形
1,2,3=各々、1,2,3人称を表す
Биб.=「聖書」（参考文献Ⅱ参照）
гл.=「章」
Грам. '80= Русская Грамматика（参考文献Ⅰ参照）
л.=「葉」
л.об.=「裏面」
Ост. Мар.=Остомирово евангелие（参考文献Ⅱ参照）「マルコによる福音」
ст.=「条」
т.=「巻」
Чех.=Рассказы(1978)「チェーホフの短編集」（参考文献Ⅱ参照）

付表Ｂ　対象とした文献の量

①約55字×約758行　②約55字×約5238行　③約65字×約990行
④i)約55字×約142行　ii)約55字×約384行　iii)約55字×約566行
iv)約55字×約41行　v)約55字×約258行　vi)約55字×約73行
vii)約55字×約860行　⑤前半の章及び64章　約55字×約941行
⑤後半の章　約55字×約1158行　⑥約60字×約1047行

表2　ИЖЕの分布

用法＼文献	①	②	③	④	i)	ii)	iii)	iv)	v)	vi)	vii)	⑤	前	後	⑥	合計
関係詞（有先行詞）	76	143	55	45	-	-	19	-	23	2	1	6	6	-	-	325
先行詞に性・数が一致	73	129	35	38	-	-	14	-	21	2	1	5	5	-	-	280
連辞省略	23	9	4	7	-	-	2	-	5	-	-	-	-	-	-	43
先行詞に性・数が不一致	3	14	20	7	-	-	5	-	2	-	-	1	1	-	-	45
連辞省略	-	5	5	4	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	14
関係詞（無先行詞）	13	17	9	6	-	-	2	-	3	1	-	4	4	-	-	49
先行詞 rel. 主格補語 格が一致	1	-	5	3	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	9
「枠構造」	10	5	6	1	-	-	1	-	-	-	-	2	2	-	-	24
接続詞的	3	19	36	6	-	-	2	-	3	1	-	7	7	-	-	71
名辞化	5	1	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15
ｃｅ～ｅжｅ..	-	-	41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41
その他	2	2	5	1	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	11
合計	110	187	166	62	0	0	25	0	32	4	1	20	20	0	0	545

註：文献の番号は、§2.2.参照。
尚、⑤の前は、前半25章までと第64章を含む。
各文献の分量については、付表B参照。

表3　ＫＯＴＯＲＹＩＭの分布

用法＼文献	①	②	③	④	i)	ii)	iii)	iv)	v)	vi)	vii)	⑤	前	後	⑥	合計
関係詞	-	3	3	35	6	7	3	1	2	1	15	8	-	8	59	108
先行詞にＴＯＴが付加している	-	-	1	9	2	-	3	1	-	-	3	-	-	-	20	30
先行詞にＴＯＴが付加していない	-	-	2	21	4	7	-	-	2	-	8	8	-	8	36	67
先行詞がくり返されている	-	-	-	5	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	3	8
不定代名詞	-	3	3	22	1	5	-	4	1	-	11	38	7	31	90	156
名詞に付加している不定代名詞	-	1	3	15	1	5	-	-	1	-	8	32	7	25	81	132
名詞に付加していない不定代名詞	-	2	-	7	-	-	-	4	-	-	3	6	-	6	9	24
疑問代名詞	-	1	-	28	1	7	2	-	-	-	18	6	1	5	8	43
不定代名詞*	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	5	7
その他	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
合計	0	7	6	89	9	20	5	5	3	1	46	52	8	44	162	316

＊については、本文註１９参照

参考文献

I.

Бауэр, Я. (1967) "К развитию относительных придаточных предложений в славянских языках," *Вопросы языкознания* No.5, 47-59.

Борковский, В.И. (ред.) (1979) *Историческая грамматика русского языка, Синтаксис, Сложное предложение*. Москва:Наука.

Борковский, В.И. & П.С. Кузнецов (1963) *Историческая грамматика русского языка*. Москва:Наука.

Буслаев, Ф.И. (1959) *Историческая грамматика русского языка*. Москва: Просвещения.

Bynon, Th. (1977) *Historical Linguistics*. Cambridge:Cambridge University Press.

Виноградов, В.В. (1940) "Основные этапы истории русского языка." *Русский язык в школе* No.3, No.4, No.5.

Винокур, Г.О. (1945) *Русский язык: Историчесий очерк*. Москва.

Ickler, N.L. (1981) *The partricle že in Old Russian; The discourse origins of conditionals and relatives*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkley.

Императорская Академия Наукъ (1867) *Словарь церковнославянского и русского языка*. Санктпетербургъ.

Качевская, Г.А. (1954) "К истории сложноподчиненных предложений с придаточным определительным." *Труды института языкознания АН СССР*, т.5., 203-223.

Кершиене, Р.Б. (1979) "Сложноподчиненные определительные предложения," в кн. *Историческая грамматика русского языка, Синтаксис. Сложное предложение* (Борковский, В.И., ред.), 56-109. Москва:Наука.

木村彰一 (1985) 『古代教会スラヴ語入門』 東京：白水社.

Корш, Ф. (1877) "Способы относительного подчинения. Глава из сравнительного синтаксиса." Москва. (reprinted) (1965) *Хрестоматия по истории грамматических учений в Росии* (Щеулин, В.В. & В.И. Медведева, сост.), 245-251.

Кручинина, И.Н. (1968) "Конструкция с местоимением *который* в современном русском языке," *Вопросы языкознания* No.2, 82-88.

Ларин, Б.А. (1975) *Лекции по истории русского литературного языка /X-середина XVIII в./*. Москва:Высшая школа.

Lehmann, Ch. (1986) "On the typlology of relative clauses," *Linguistics* 24, 663-680.

Lehmann, W.P. (1974) *Proto-Indo-European syntax*. Austin:University of Texas Press.

Лихачев, Д.С. (1951) "Иван Грозный — писатель," в кн. *Послания Ивана Грозного*. (参考文献Ⅱ参照)

_____(ред.) (1980) *История русской литературы X-XVII веков*. Москва:Просвешение.

Ломтев, Т.П. (1956) *Очерки по историческому синтаксису русского языка*. Москва:Изд. Московского Университета.

Лурье, Я.С. (1979) "Переписка Ивана Грозного с Курбским в общественной мысли древней Руси," в кн. *Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским*(参考文献Ⅱ参照), 214-249.

Martinet, A. (1952) "Function, Structure and Sound Change," *Word* 8, 1-32.

松井茂雄 (1966) 「司祭長アヴァクム自伝」(訳)『スラヴ研究』10号, 85-144.

Matthews, W.K. (1960) *Russian Historical Grammar*. London:University of London, The Athlone Press.

三谷恵子 (1984) 「Домостройの言語－コンシン所蔵写本による言語的特徴の研究より－」『ロシア語ロシア文学研究』16号, 69-84. 東京：日本ロシア文学会.

Моисеева, Г.Н. (1953) "Автор *Казансой истории*," *Труды отдела древнерусской литературы института русской литературы*. т.1X, 266-288.

Ожегов, С.И. (1988[20]) *Словарь русского языка*. Москва:Русский язык.

Потебня, А.А. (1968) *Из записок по русскому грамматику*. т.Ш. Москва:Просвещение.

佐々木秀夫 (1982) 『ロシア古文典』 東京：ナウカ.

Срезревский, И.Й. (1893-1903) *Материалы для словаря древнерусского языка*. Санктпетербургъ:Императорская Академия Наукъ.

Стеценко, А.Н. (1977[2]) *Исторический синтаксис русского языка*. Москва: Высшая школа.

Филин, Ф.П. (1981) *Источки и судьбы русского литературного языка*. Москва:Наука.

_____(1982) "О лексике древнерусского языка," *Вопросы языкознания* No.2., No.3.

Шведова, Н.Ю. (ред.) (1980) *Русская грамматика.* т.П. АН СССР. Москва:Наука.

II.

Библия. Книги священного писания ветхого и нового завета (1976) Издание московской патриархии. Москва.

Домострой по списку Императорскаго общества истории и древностей российскихъ (1882) Москва. /Rarity Reprint nr.18. (1971) Hertfordshire:Bradda Books Ltd.

Жизнеописания Аввакума и Эпифания (1963) Робинсон, А.Н., (сост.). Москва:АН СССР

История о Казанскомъ Царствѣ (1903) Полное Собрание Русскихъ Лѣтописей. т.19. Санктпетербургъ. Москва. /Slavica reprint. nr.67/12. (1973) Vaduz Liechtenstein:Europe Printing Establishment.

Остромирово евангелие (1845) Санктпетербургъ. /Monumenta lingua slavicae t.1 (1964) Wiesbaden:Otto Harrassowitz.

Памятники Литературы Древней Руси, Начало русской литературы X-начало XП-века. (1978) Дмитриев, Л.А. & Д.С. Лихачев, (сост.) Москва:Художественная литература.

_____, *XП век.* (1980) Там же.

_____, *XШ век.* (1981) Там же.

_____, *X1У - середина XУ века.* (1981) Там же.

_____, *Вторая половина XУ века.* (1982) Там же.

_____, *Конец XУ - первая половина XУ1 века.* (1984) Там же.

_____, *Середина XУ1 века.* (1985) Там же.

_____, *Вторая половина XУ1 века.* (1986) Там же.

Памятники русского народно-разговорного языка XУП столетия (1965) Котков, С.И. & Н.И. Тарабасова, (подгот.). Москва:Наука.

Памятники русского права, вып.4. (1956) Черепнина, Л.В., (ред.) Москва:Государственное издательство юридической литературы.

_____, вып.5. (1959) Там же.

_____, вып.6. (1957) Там же.

Памятники русской письменности ХУ-ХУ1 вв. Рязанский край (1978) Котоков, С.И., (ред.). Ленинград:Наука.

Памятники южновеликорусского наречия. Отказные книги. (1977) Котков, С.И. & Н.С. Коткова, (ред.) Москва:Наука.

Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским (1979) Лурье, Я.С. & Ю.Д. Рыков, (подгот.). Ленинград:Наука.

Послания Ивана Грозного (1951) Лихачев, Д.С. & Я.С. Лурье, (подгот.). Москва-Ленинград:АН СССР. /Slavica reprint. nr.41.(1970) Vaduz Liechtenstein:Europe Printing Establishment.

Рассказы (1978) Чехов, А.П. Ленинград:Лениздат.

Русская демократическая сатира ХУП века (1977[2]) Адрианова-Перетц, В.П. (ред.) Москва.

Русские повести ХУ-ХУ1 веков (1958) Скрипиль, М.О., (сост.). Москва: Гослитоздат.

Судебники ХУ-ХУ1 веков (1952) Мюллер, Р.Б. & Л.В. Черепнина, (подгот.). Москва-Ленинград:АН СССР.

（ふじしろ　せつ、博士後期課程）